

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 5

朴 希沙(Kisa Paku)

今回は、スーの事例を紹介した後、マイクロ・アグレッションが生じた際に被害者に生じる複雑な心理についてキャッチ 22 状態という用語を用いて紹介しました。今回もふりかえりを行った後、極端なヘイトスピーチとマイクロ・アグレッションの関係についてスペクトラムという観点に基づいて述べたいと思います。

・はじめに ～前回のふりかえり～

先日、立命館大学にてマイクロ・アグレッションに関するワークショップを行いました。対人援助学会の企画のひとつとして

行ったため、様々な方が参加してくださり、改めてマイクロ・アグレッションを取り扱う難しさや可能性を感じました。発表は私だけでなくマイクロ・アグレッション翻訳会をやっている仲間も何人か一緒でした。私たちはまず、なぜマイクロ・アグレッションという概念に着目したのかを紹介しました。私たちは（少なくとも私は）、マイクロ・アグレッションを、例えば「あれはマイクロ・アグレッション」「これはマイクロ・アグレッションじゃない」等とラベルづけをするために着目したわけではありません。もちろん、マイクロ・アグレッションは現在米国を中心に議論が展開されているものであり、日本においてはどのような

事例が存在するのか調査することは大切だと思います。ですが私はマイクロ・アグレッションという概念が何かを評価したり分類したりするためだけでなく、対話の促進剤になればよいと思っています。例えば、「してもの会」で在日コリアンの当事者研究を行っていた時、ヘイトスピーチとはまた異なる日常にあふれる日本人との間の葛藤やもやもやした気持ちをどのように表現すればいいか試行錯誤していました。そのような「もやもや」を表現したり、テーマとして取り上げて話し合ったりするためのひとつの契機として、マイクロ・アグレッションを活用することはできないか、と考えています。それは同時に、「自分は差別などしない」と思っている人たちにとっても、身近な関係の中での自分自身のあり方について振り返る機会になるのではないかと、と思っています。

さて、今回はスーの事例を紹介し、マイクロ・アグレッションが被害者に引き起こす葛藤状況についてキャッチ 22 状態という用語を用いて説明しました。そして、マイクロ・アグレッションの最も深刻な特徴として、対話を不可能にさせる点があるのではないかと述べました。なぜなら、マイクロ・アグレッションは差別的なニュアンスを含んだ行為であるにもかかわらずそれを言語化することが難しく、できたとしても「ことを荒立てない方がいい」「なにをそんなによくよしているの？」等と経験を無化する反応を引き起こしやすいからです。そして、それはマイノリティの孤立化にもつながっていくと考えています。

それでは、このようなマイクロ・アグレッションはどのように生じてしまうのでしょ

うか。どのような人が、マイクロ・アグレッションを行ってしまうのでしょうか。そもそも、露骨なヘイトスピーチや差別と、マイクロ・アグレッションはどのような関係にあるのでしょうか？

・マイクロ・アグレッション：イントロダクション④

先日、インターネットのニュースページを見ていた時のことです。私の目に「朝鮮人は皆殺しに」というプラカードを持った男性の写真が飛び込んできました。これは、あるヘイトスピーチを行う団体の活動を映したもので、ニュースのひとつとして取り上げられていました。一方、先日の対人援助学会での発表の際には、「露骨なヘイトスピーチはなくなってきていますよね」といった声も聞きました。露骨な差別をする人はごくわずかで、そのような人たちと“普通の”人は違う、彼らは特別な人達だ、と考える人も少なくないかもしれません。

また、今回マイクロ・アグレッションに関するワークショップを準備している際、マイクロ・アグレッションを取り扱うことの難しさのひとつに、自分がマイクロ・アグレッションを行ったと責められたり糾弾されたりすることへの恐れがあるのではないかと、と他の発表者と話し合いました。前回紹介したスーの事例でも、スーからの問題提起に対しフライトアテンダントは「私は人種で判断などしていませんよ！」と答えました。もし差別をするのが“特別なこと”であり、差別をする人など“特別な人”であるのなら、自分がそんな特別に悪い人

間だと非難されるのは、確かに嫌なものです。

ですが、Sue(2010)では、「レイシズムを理解するということは、私たちの先入観や、ステレオタイプ、偏見は意識的な気づきのスペクトラム上に存在することに気がつくことを意味する」と言われています。これは、レイシズムとは意識的で露骨なものばかりではなく、意識的であったり無意識的であったり、曖昧なものも存在することを意味しています。またこのことは、私たちの社会で暮らしているすべての人にとって、偏見や差別から完全に自由であることはほとんど不可能であることも意味していると思います。例えば、C. Goldin and C. Rouse (2000) によるアメリカのオーケストラの事例があります。このオーケストラでは以前は入団審査に合格する女性奏者の割合が5%~10%だったのですが、審査員から応募者を見えなくさせるブラインド（目隠し）オーディションを行ったところ、女性奏者の採用者数が数倍に上がったのです。公平な採用を努める審査員ですら、無意識的に男性を選んでいたことが分かります。

・スペクトラムという考え方

一方の極には、意図的に、悪意を持ってヘイトスピーチやヘイトクライムを行う人々がいるでしょう。他方、無意識的に外国人や障害のある人を避けたり、慰めるつもりで「僕たちはおんなじだよ」と相手の人種的・民族的体験を無化したりしてしまうようなマイクロ・アグレッションもあるでしょう。これらの言動には、もちろん程

度や質の差異が存在します。しかし、社会的立場の違いから、立場の強い方が弱い方へと攻撃的な言動を行うという点ではひとつのスペクトラム上の異なる点に位置しています。

つまり、立場の異なる人の中でやりとりが生じる時には、常にこのスペクトラム上のどこかに自らの言動が位置づくと思えてもいいかもしれません。つまり差別か差別ではないかという問題よりも、どの程度自らの立場から発せられる言動に意識的であるかという観点です。ここでは一旦善悪の評価は外して、非常に意識的で故意なものから無意識的で曖昧なものまで存在し、その中のどこかに自らの言動が位置すると考えるわけです。私たちは皆偏見や差別から自由になれないと仮定するなら、それに対してどの程度意識的であるのか、ということが次に問われてきます。

・ひとりで意識できるもの？

意図的に、故意に差別やヘイトを行う人達はさておき、多くの方は差別や偏見に対して否定的な考えを持ちながらも、自らの内面化したものに対して無意識的であると思います。また自らの言動をすべて意識化することが不可能であるのと同じように、自らの無意識的な差別や偏見をすべて意識化することは非常に困難でしょうし、そのことにどれほどの意味があるのかもわかりません。

むしろ、問題はやりとりの中で生じる具体的な場面に即して理解されるべきだと思います。ある側面においてマイクロ・アグ

レッションが生じ、それに対して話し合いが必要になった時、私たちは自分自身の内面化した差別や偏見、そしてそれを生み出す社会について初めて向き合い考えるのかもしれない。つまり、そのような“他者”との出会いがあって初めて、気づきが生じるわけです。この社会で暮らしている以上、そこから完全に自由な言動が出来ないのは当たり前のことです。ですからマイクロ・アグレッションのような無意識的な差別や偏見を取り上げる際には、ある種の“当たり前さ”をいかに問い、深めていけるかという話が重要になるのではないかと考えています。そしてそれは、いつも具体的な誰かとの関係、具体的などこかの場面に即しているものだと思います。

・マイクロ・アグレッションを取り扱うことは出来るのだろうか？

以上より、私たちは差別や偏見と常に隣り合わせであり、それはある意味当然であることを述べました。より大切なことは、具体的な誰かと、具体的な場面で自らの差別や偏見によって問題が生じた時に、どのようにそれを話し合っていけるかということだと思います。気づきのスペクトラムの、どこに自分はいるのだろうかという問いを問うことです。

しかし、マイクロ・アグレッションの特徴のひとつに、それを言語化することの難しさや問題として取り扱ってもらうことの難しさがあることを述べました。そこで、次回以降はマイクロ・アグレッションの取り扱い方についての話に入っていきたいと思います。マイクロ・アグレッションの概説にも触れながら、私の関わっていたグループ等でどのような実践が行われていたかを紹介していきたいと思います。どうぞ、お楽しみに！

・・・続く

【参考文献】

- C. Goldin and C. Rouse (2000). *American Economic Review* 90, 715-741.
- Sue, D.W. (2010). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. Hoboken, N. J.: John Wiley & Sons.